

二〇一六年度

# 「国語」問題

## 注意事項

- 1 問題および解答用紙は、試験開始の合図があるまで開かないでください。
- 2 解答はすべて解答用紙の所定の欄に楷書で記入してください。
- 3 受験番号および氏名は解答用紙の所定の欄に記入してください。
- 4 問題は1ページから11ページまでです。

〔問題一〕 次の(1)～(2)の各設問に答えなさい。

(1) 1～4の文中の——線部(a)～(h)について、漢字はひらがなで読み方を示し、カタカナは漢字に改めなさい。

1 第十三条 すべて国民は、個人としてソ<sup>(a)</sup>ンチヨウされる。生命、自由及び幸福追求に対する国民の権利については、公共のフ<sup>(b)</sup>クシに反しない限り、立法その他の国政の上で、最大のソ<sup>(c)</sup>ンチヨウを必要とする。

(日本国憲法 第十二条)

2 第二十六条 第二項 すべて国民は、法律の定めるところにより、その保護する子女に普通教育を受けさせる義務を負ふ。義務教育は、これをムシヨウとする。

(日本国憲法 第二十六条)

3 ある時<sup>(d)</sup>雨の降る晩のことです。私を乗せた人力車は、何度も大森<sup>(e)</sup>界隈のケ<sup>(f)</sup>ワしい坂を上ったり下りたりして、やっと竹藪に囲まれた、小さな西洋館の前に梶<sup>(g)</sup>棒を下しました。もう鼠<sup>(h)</sup>色のペンキの剥げかかった、狭苦しい玄関には、車夫の出した提灯の明りで見ると、印度人マテイラム・ミスラと日本語で書いた、これだ

けは新しい、瀬戸物の標札がかかっています。

(芥川龍之介「魔術」より)

4 選挙権年齢を現在の二十歳以上から十八歳以上に引き下げる改正<sup>(g)</sup>コウシヨク選挙法が成立した。次の参院選からテ<sup>(h)</sup>キヨウされ、十八、十九歳の約二四〇万人が新たに有権者になる。

(新聞記事による)

(2) 書き言葉として正しいものを次の中から二つ選び、記号で答えなさい。

- ア 緊張のあまり、昨夜は寝れなかった。
- イ 頭痛が痛いので、学校を休んだ。
- ウ 好き嫌いはない。なので、食べられないものはない。
- エ 行ける気がしなく、登頂をあきらめた。
- オ もし雨だと、運動会は中止だ。
- カ 昨日はテレビを見たり、部屋に入って勉強もした。
- キ 眠れない夜は、羊を数える。
- ク 曇り空のため、星空が見られなかった。
- ケ 断トツの一位でゴールした。

〔問題二〕 次の文章を読んで後の設問に答えなさい。

その頃、下鳥羽の車つかひに、大仏の孫七とて、その生まれつき、千人にも優れて、都通ひに東寺辺りの小家へはいることを、頭つかへて迷惑す。されども、**A**少しも力なくて、達者事にひけをとることたびたびなり。一斗の重め、片手にては上がらず、世間の笑ひものぞかし。この里の若者、一石二斗を宙差しにする者あまたなり。

大仏一代、**B**男子ひとり、まうけぬるに、おとなしくなることをまぢかね、はや取立の時分より、六尺三寸の棒を持ちならはせ、三歳の時は、はや一斗の米を上ぐる。それよりだんだん仕込み、**C**八歳の春の頃、手慣れし牛の子を産みけるに、荒神の宮めぐりも過ぎて、やうやう牛の子も固まり、我と草むらにかけまはるを捕らへて、初めてかたげさせけるに、何の仔細もなく持ちければ、毎日三度づつかたげしに、**D**次第に牛は車引くほどになれども、そもそもより持ち続けぬれば、九歳時も捕らへて宙差しにするを、見る人興を覚ましぬ。後は親仁にかはり、洛中・洛外の大力、十五歳より鳥羽の小仏とぞ名乗りける。

〔『西鶴諸国ばなし』より〕

※1 一斗…容量の単位。一升の十倍。約一ハリットル

※2 一石…容量の単位。一斗の十倍

※3 六尺三寸…約一九〇センチメートル

問1 — 線部(1)「優れて」の意味として適当なものを次の中から

一つ選び、記号で答えなさい。

ア 頭脳が明晰であること

イ 身体が大きいということ

ウ 体力が有り余っていること

エ 運動神経が発達していること

問2 — 線部(2)「おとなしくなる」の意味として適当なものを次

の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 成長する

イ 消沈する

ウ 優しくなる

エ 静かになる

問3 ~~~~~線部(a)~(d)の「の」のうち、次の例文の傍線部「の」と

同じ働きをしているものはどれですか。適当なものを一つ選び、

記号で答えなさい。

冬はつとめて。雪の降りたるはいふべきにもあらず。

問4 本文中には次の語句が抜けています。A、Dのどこに入れるのが適当ですか。記号で答えなさい。  
無念に思ふうちに、

問5 本文の内容と合致しないものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 大仏の孫七は、体は大きいのに力がなく世間の笑い者になっていた。

イ 下鳥羽の若者の中には一石二斗の米を頭上まで持ち上げる人が多くいた。

ウ 孫七の息子は三歳になると一斗の米を持ち上げられるようになっていた。

エ 子牛は草むらを駆け回っているうちに毎日三度ずつ車を引くほどの力をつけた。

オ 孫七の息子は十五歳から鳥羽の小仏と名乗るようになった。

〔問題三〕 次の文章を①～③の条件にしたがって、八十字以上百字以

内で要約しなさい。

① 三文で要約すること

② 第二文の書き出しを「しかし」、

第三文の書き出しを「つまり」で始めること

(……………。しかし……………。つまり……………)。

③ 解答欄の一マス目から書き始め、句読点も一字に数えること

書店に行くと、さまざまな本に出会うことができる。お目当ての本を購入するだけでなく、せっかくだから別の作家の本も見てみよう、とか、ああこんなジャンルの本も出ているのだな、ちょっとめくってみよう、とか、思わず他の本も手に取ってしまう。私たちは書店に行くたびにたくさんの本の存在を知る。

書店でずらりと並ぶ本を目にするたび、私たちは、あらゆる本はいつでも手に入れることができると思いがちだが、実はそうではない。このような紙媒体の本は、求める人すなわち読者が少なくなると出版されなくなる。そんな本を出版頒布してもビジネスにならないからである。こうして、一度出版した本の発行・販売を中止することを「絶版」と言う。出版界では、現段階で読む人が一定数を超えない本を絶版にするのが常識だ。私たちが「この本が読みたい」と思っても、出

版社が絶版にするともうその本を手取ることはできない。

だが、その常識を覆す存在が登場した。電子書籍である。

電子書籍は、紙媒体の出版ビジネスでは利益が出ないとみなされた本を、再び手軽に読める状態によりみがえらせた。絶版本だけでなく希観本<sup>※1</sup>、所蔵している図書館まで足を運ばなければ閲覧できなかった本、紙の劣化が著しく一般読者には閲読が許されなかった本、そういった本の数々をデジタル化し、電子機器のディスプレイ上で読めるように複製させたのだ。電子書籍は、これまで「読者が読みたかったけれど、読むことの難しかった本」への距離を飛躍的に近づけてくれた。

電子書籍サービスは「読む人が今ここにいないようがいまいが、いつかアクセスしたい人が出てきたときにすぐにアクセスできるようなシステム」を作り上げた。まだ存在しない読者さえも読者として認知して、その利便性に配慮した。電子書籍がもたらした最大の衝撃はこのことにある。今はないけれど、これから出て来るであろう読者を、読者として認知したこと。その新しい発想を生み出したことこそが電子書籍の功績なのだ。

(本文を作成するにあたり内田樹『街場のメディア論』を参考にした)

※1 希観本…古書や限定版など、世間では容易に見られない書物



〔問題四〕 次の文章を読んで後の設問に答えなさい。

- ① フランスの社会学者マルセル・モースは伝統的社会（未開社会）だけではなくここには古代ローマや古代ヒンドゥーも含まれる）において、「与える義務」「受け取る義務」「返す義務」という三つの義務が人びとの関係性の基盤を成していることを観察、体系づけた。こうした共同体の構成員は、個人の利益に基づいて贈与を行うのではなく、<sup>(1)</sup> 贈与すること自体を仕向けられている。なぜなら、「与える」「受け取る」「返す」の義務はそれぞれが分かちがたく結びついており、その行為の輪に加わることは、人は必ず自分以外の人間の利益や意思を前提として行動することを意味するからだ。贈与関係のもとで、自己の利益と他人の利益は一体にして不可分なものとなる。お中元やお歳暮、あるいはご祝儀<sup>しゅうぎ</sup>でさえ、贈与する方は何がしかのものが「返される」ことを前提にしており、また受け取った側も何がしかを「返す」ことを前提とする。この関係性は循環することで強化され、持続性を保つていくことになる。
- ② モースは贈与が行われる主たる理由として、気前の良さをめぐる承認闘争があることも指摘している。つまり、人びとが社交することを前提とした場合、そこには何らかのかたちで、関係性を築く必要が出てくる。そして、贈与という行為でもって人びとは関係性を結ぶことができる。つまり、モノや利益のために関係があるのではなく、関

係を構築するためにモノや利益が存在するのである。

- ③ <sup>\*1</sup> 社会的結合を生成させる核心的要素は、この贈与関係にある。それは「与える」「返す」といった他者との<sup>\*2</sup> 互酬的な関係でもって社交性が生まれ、社交性を通じて共同体が与えられることになるからだ。その反対に、<sup>(2)</sup> 合理的な人間関係、つまり何かを得るために何かを与え、何かを与えれば何かを得るという関係のもとでは、人びとは「受け取る」と「もらう」だけの存在に矮小化<sup>わいしょうか</sup>されてしまい、その人が共同体の企て（政治と言い換えてもいい）に関わろうとする意思は、内在的には生まれてこないことになる。
- ④ もう少し砕いてみよう。教育学者の矢野智司はモースの交換贈与の類型のうち、返礼の期待されない「純粹贈与」に注目して、それが計算はおろか経験も動機とせず、ただただ「体験」することでしかなし得ない行為だという。かれはボランティアの本質は、本来ならば有用なものに投入されるエネルギーや時間を、相手がもしかしたら受け取らないという危険性を承知したうえで費やすことにある、とする。それは「有用性」という回路から離脱することになるが、しかしその乖離<sup>かいり</sup>があるからこそ個人の喜びは生まれる。自分を無防備なまでに相手のもとにさらけ出すという「賭け」があるからこそ、それは貴重なものとして扱われ、その危険な「賭け」が成功するという得がたい体験があつて、人との関係は強度を増すことになる。このような他人との関係はボランティア活動<sup>\*3</sup> だけでなく、政治行為を含むボランティア

な活動、すなわち「利益—コスト」にも、「有用性」にも準拠しない、すべての活動に当てはまる。

5 哲学者のシモーヌ・ヴェイユは、一九三〇年代のフランス人民戦線の誕生にともなうゼネストに参加した時の感覚を、その日記に綴っている。

このストライキはそれ自身一つのよろこびなのだ。一つの純粹なよろこび。まじりけのないよろこびなのだ。(略) かつて私が働いていたときには、ひとりひとりが自分の機械にかかりきり、全くひとりぼっちだと感じていた作業場、その作業場でなんと友達のだだなかにいると感じることか！(略) 自分たちを屈服させた苛酷な必然性のかくも明らかな象徴である機械の情け容赦ない騒音に代って、音楽や歌や笑い声を聞くよろこび。

6 彼女がここで謳っているのは、ヒロイックで革命的な行為でも、ストライキによって資本主義に打撃を与えた喜びでもなく、「賭け」に成功したことの瞬間的な成功体験である。それゆえにヴェイユはストライキを「夢のような」と表現した。自分の切望していたことが実現したからではない。

7 彼女が表現したこの喜びを理解するためには、「関係(リレーション)」の基盤となる何らかの「非合理(イレージョナル)」なものを注

視する必要がある。成功しそうにもない企て、実現されるとも限らない理想は、少なくとも科学的な推論や合理的な計算からは生まれな

い。

8 経済学者センが「利益—コスト」を自らの行動規範とする人間を「合理的な愚か者」と呼んだことはよく知られている。彼がそのような人間を「愚か者」としたのは、自分の利益を最大化しようとして最適な手段を選んだつもりでも、選択した結果が最終的に明らかになるまで、その選択が最適なものだったのかどうか確認できないという、この世のどうしようもない不条理さをわかっていない人間だからだ。センはまた、そもそもその人がどのような選択肢をもっているのかは社会環境によってあらかじめ決められてしまっているのだから、結局、合理的な個人は「社会的には愚か」であるしかない、とも述べた。(6) こうした行動規範に対置されたのは共感の感情とコミットメントに基づく行為である。ここでいう共感とは、他者の喜びを自らの喜び、他者の苦痛を自らの苦痛と感ずること、コミットメントとは、他人が被っている不正を止めるために何らかの行為を施す用意があることを指す。

9 センがここで主張しているのは、自分の利害を忘れて他人のために尽くせといった単純なことではない。彼が言ったのは、人びとの利益とは社会的なものから切り離されるべきではない、という単純な真実だ。彼が「潜在能力アプローチ」と呼んだこの世界認識のもとで

は、人びとの利益とはその人が生きている社会のなかで広範に認められている利益の集体と定義される。そのうえで、人びとにとって何が必要であるのかは、個人の選好から測られるべきものではなく、社会のなかに生きる個人にとって何が欠損しているのかという観点から測られるべきだ、としたのである。これが潜在能力概念のすべてではないが、個々人の善と社会の善が、それぞれに変化するもの、流動的なものであることを前提にしつつ、「(自分と他人が) 何を得られるか」ではなく、「(自分と他人が) 何を必要としているのか」をスタート地点にして社会を構想していこうとするのがセンの主張したことのエッセンスだった。

10 この視点は、またマルセル・モースの「市民は自己と従属集団、そして社会を考慮に入れて行動」することこそが道徳的な行為である、という考えと通じる。

11 モースはいう。

道徳的な人間、義務を果たす人間と同様に、そして科学的に思考する人間、理性的な人間と同様に、長い間、人間は他のものを有していたのである。人間が計算機によって複雑化された一つの機械になってしまっただけから、まだそれほど時間が経過していない。(略) 個人がその目的を粗野に追求することは、全体の諸目的や和合にとっても、個人の労働とその喜びにとっても有害である。

る。結局、個人そのものにとっても有害なのである。

12 このモースの指摘を使えば、政治における道徳とは何かを考えることができるようになる。それは、決して個人の目的から逆算して何が正しい選択であるのかを合理的に思考する「利益—コスト」と「有用性」の連鎖のなかにはなく、他人とともに他人のなかで行動するところから生まれてくるものである。

13 政治という行為が存在しているのは、個人が個人の手だけでは手に入れることができない公共財が提供されなければならないからだ。そうであるならば、人びとは自分の目的に照らし合わせて自分に最適な手段を選べば自分の欲するものを手に入れられるとは限らない。モースやセンのいうように、そのように行動しつづければ、自分の欲するものがますます遠のいていくという袋小路に陥ることになる。そうであれば、人びとはまず自分以外の存在と関係を築き上げ、その関係を維持する場を生産していくことですか、自らの欲するものを手に入れることはできない。そのためには、政治を創造すること、そして政治が創造されるための条件を整備しなければならない。

14 人びとは、このどうしようもなく手間隙ひまがかかる政治から逃れようがない。まずはこの事実を直視するところから、政治は構想される必要がある。

(吉田徹『感情の政治学』による)

- ※1 社会的結合：政治的変革の原動力となるような人づきあいや社交のこと
- ※2 互酬的な関係：何かを受け取られたならば、その返礼が期待されるという関係
- ※3 ボランティア：自発的であるさま
- ※4 「利益—コスト」：何かをしたら（＝コスト）何かが得られる（＝利益）と
- ※5 いった報酬型の行動規範のこと
- ※6 ゼネスト：ゼネラル・ストライキの略。労働者が全国的規模で業務を停止する行為

問1 ——線部(1)「贈与すること自体を仕向けられている」とありますが、それはなぜですか。その理由として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 貨幣経済が未成熟な伝統的社会では、時に交換が優先されるから
- イ 個々が贈与することを目指せば、結果的に共同体も豊かになるから
- ウ 三つの義務を果たすことで人びとの関係性が作られ、保たれるから
- エ 義務として規定しなければ、隣人を愛する精神は生まれてこないから
- オ 互いに贈与し合う輪に加わることが、人を理性的な存在にしているから

問2 ——線部(2)「合理的な人間関係」とありますが、どのような関係ですか。その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 自分以外の人間の利益や意志を前提とした人間関係
- イ 自己の利益と他人の利益が不可分となるような人間関係
- ウ 共同体の中での役割を重視する人間関係
- エ モノや利益を得ることを優先して構築する人間関係
- オ 相互に共同体の企てに関わろうとする人間関係

問3 ——線部(3)「危険な「賭け」とありますが、「純粹贈与」のどのような点が「危険」だと言えるのですか。その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア あらかじめ返礼が得られないことが分かっているという点
- イ 事前の計算や以前の経験に基づいて行動を起こすという点
- ウ 自分が費やしたエネルギーや時間が無駄になる場合があるという点
- エ 自分の利益のために行動したと誤解を受ける可能性があるという点
- オ 善意に基づく行動でさえもが政治行為だと受け取られてしまう点

問4 ——線部(4)とありますが、ヴェイユがストライキを「夢のよう」だと表現した理由について次のように説明しました。空欄に当てはまる適当な語句を④⑤段落から抜き出さない(句読点や「」などの記号も一字に数える)。

ストライキのようなボランティアな I (四字) は成功するかどうかも分からない、 II (十四字) した「賭け」ではあるが、もしそれが成功するならば III (十一字) ことになる。ヴェイユはストライキという「賭け」の成果として、自分は「全くひとりぼっち」ではなく、仲間と「音楽や歌や笑い声」を共有することができるのだ、という「IV (七字)」を得られた。彼女はこのことを「夢のよう」だと表現している。

問5 ——線部(5)「そのような人間を「愚か者」とした」とありますが、なぜ「愚か者」だと言えるのですか。その理由として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 個人が負担すべきコストを最大限減らそうとするその態度が、あまりに正直すぎるから
- イ 合理的に選択したつもりでも、その選択が最適だったかどうかは事後的にしか確認できないから
- ウ 自分の利益を最大化しようとする、合理的な判断が鈍って誤った判断しかできなくなるから
- エ この世のどうしようもない不条理さをわかっているながら、それでも合理的にふるまっているから
- オ 個人が生きていく社会環境はあらかじめ選択可能であるのに、それをしようとしなから

問6 ——線部(6)「こうした行動規範」とありますが、それは何を指し示していますか。当てはまるものとして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 「関係(リレーション)」を重んじる行動規範

イ 「非合理(イレーショナル)」なものを重んじる行動規範

ウ 「利益—コスト」型の行動規範

エ コミットメント型の行動規範

オ 「潜在能力アプローチ」型の行動規範

問7 ——線部(7)「センの主張したこと」に合致しないものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 人びとの利益とは社会的なものから切り離されるべきではない。

イ 人びとの利益とはその人が生きている社会のなかで広範に認められている利益の集合である。

ウ 人びとにとって何が必要であるのかは、個人の嗜好から計られるべきものではない。

エ 個々人にとって必要なものを検討し、集積したものが社会の利益なのである。

オ 社会を構想する際には、社会のなかに生きる個人として社会に何が必要とされているのかを考えるべきだ。

問8 ——線部(8)「政治における道徳」を次のように説明しました。  
V・VI・VII に当てはまる語句の組み合わせとして最も適当なものを後の選択肢から選び、記号で答えなさい。

政治という行為によって、人は個人では得ることのできない公共財を得ることができる。ただし、それが得られるのは人が個人の目的から逆算して何が正しい選択であるのかを V 的に思考したときではない。「有用性」に準拠して何かを得ようと思えば、それはますます遠のいていくことになる。モースが見抜いたように、政治とは返礼を期待しない VI によって築かれた VII 性の中にたち現れるものである。人はそうして出来上がった社会のなかで生きる個人なのであり、その社会のなかで「何が必要か・何が求められているか」を優先するような精神が求められるのである。

ア V 内在 —— VI 行動 —— VII 流動

イ V 理性 —— VI 行為 —— VII 必然

ウ V 創造 —— VI 革命 —— VII 人間

エ V 政治 —— VI 承認 —— VII 社会

オ V 合理 —— VI 贈与 —— VII 関係

(以下余白)

国語

二〇一六年度  
解答用紙

	氏名
--	----

成績記入欄
※

受験番号

この欄には何も記入しないこと

〔問題一〕

(1)	
(e)	(a)
しい	
(f)	(b)
(g)	(c)
(h)	(d)

(2)

〔問題二〕

問 1	
問 2	
問 3	
問 4	

問 5	
-----	--

〔問題三〕
